

いものを軽石と呼ばず「軽石と火山灰」と分けることも多い。
カルデラ：多くの場合輪かくがほぼ円形の、火山活動によってできた陥没地（かんぼつち：落ちこんだところ）のこと。火口より大きく、多くの場合直径約1km以上で、周囲が急なガケで取り囲まれていることが多い。

カルデラ湖（カルデラこ）：カルデラに水がたまってできた湖。洞爺湖（とうやこ）や摩周湖（ましゅうこ）、支笏湖（しこつこ）など。かつては三股盆地（みつまたぼんち：上士幌町）もカルデラ湖であったという。（ p36）

監獄（かんごく）：今の刑務所（けいむしょ）。（ p160）

間氷期（かんびょうき）：氷期と氷期の間の暖かい時期。

顔料（がんりょう）：ものに色をつける時に使う材料のうち、水や油にとけないもの。水性顔料（すいせいがんりょう）は水の中にとても細かい顔料が混ざっている状態のもので、とけているのではない。

き

帰農（きのう）：農業をやめていた人や都会で農業をやっていた人が、農業をはじめること、また農業をするためにふるさとへ帰ったり、都会をはなれたりすること。（ p185）

凝灰岩（ぎょうかいがん）：火山からふき出した火山灰が地上や水中にたまり積もり固まってできた岩石。「タフ」ともいう。

恐竜（きょうりゅう）：中生代の陸上八虫類をいう。大きなものになると体長35m、体重75トンというものまでいた。約6,500万年前に絶滅した。

く

空襲（くうしゅう）：飛行機やヘリコプターなどによる攻撃（こうげき）。（ p197）

くんせい（燻製）：保存性や風味を高めるため、魚や肉などをけむりでいぶしたもの。

こ

交易（こうえき）：はなれたところに住む人と、ものの交かんや売買をおこなうこと。

洪水（こうずい）：川の水が大雨や雪解けによって、ふだんより流れが増えること。増水（ぞうすい）。水がふだんの流れからあふれ出る「はんらん」を指すこともある。

鉱物（こうぶつ）：水晶（すいしょう）や雲母（うんも）のように化学的成分が均一の結晶体（けっしょうたい）で、一定の性質をもつ無機質（むきしつ）の固体物質をいう。ちなみに岩石は、鉱物やくだけた岩石が集まってできたもの。

広葉樹（こうようじゅ）：カシワやモミジなどのように広く平たい葉をもつ樹木。

護岸（ごがん）：川岸を水の流れから守ること、または守る方法。（ p212）

国郡制（こくぐんせい）：明治2年（1869） 開拓使（かいたくし）が北海道を11国86郡に分けた制度。十勝地方は「十勝国（とかちのくに）」となり、7郡に分けられた。足寄郡（あしよるぐん）は釧路国（くしろのくに）に入れられた。郡名は、多少ズレはあるが、多くが今でも使われている。（ p156）

黒曜石（こくようせき）：ガラス質の火山岩（かざんがん）。

黒っぽいものが多く、割ると貝ガラのような鋭い断面（だんめん）になる。ねばり気が強く（二酸化ケイ素が多く）、水分

の多いマグマが急に冷やされてできるといわれる。石器の材料としてよく使われる。

古砂丘（こさきゅう）：大昔にできた砂丘（さきゅう）のこと。土におおわれたあとでも波をうった地形となっていることがある。十勝では約4万年前の支笏（しこつ）火山灰による古砂丘と約1万8千年前の恵庭（えにわ）火山灰による古砂丘がある。

小作（こさく）：広い土地を持つ地主から土地を借りて耕し、定められた小作料（おもに生産物）を地主にはらうこと。小作をする人を小作人（こさくにん）、小作者（こさくしゃ）、小作農（こさくのう）と呼ぶ。

コタン（アイヌ語）：集落のこと。

戸長役場（こちょうやくば）：役場といっても住民によって選ばれた市町村長や議員はなく、国から任命（にんめい）される戸長のもとで、地域の管理をおこなった。

骨角器（こっかくき）：動物の骨や角（つの）を利用して作られた道具。旧石器時代にも使われていたが、石器や土器とちがって分解され土にかえるため、古い時代のものはなかなか見つからない。

さ

栽培漁業（さいばいぎょぎょう）：自然産卵（しぜんさんらん）の場合、卵から仔魚（しぎょ）になり、稚魚（ちぎょ）になるまでの間に多くの魚が死んでしまう。そこで、人の手で卵からふ化させ、稚魚（ちぎょ）になるまで育ててから時期を見て自然に放すと、少ない卵からでも多くの成魚が育つようにできる。このように途中（とちゅう）まで人の手で育てた上で魚をとることを栽培漁業という。養殖（ようしょく）のように成魚になるまで育てることをしない。サケなどでおこなわれている。

細胞（さいぼう）：生き物の体を形づくる基本的なもの。

在来種（ざいらいしゅ）：もともとその地域で生きていた生き物。外来種（がいらいしゅ）

砂丘（さきゅう）：砂漠（さばく）など砂が広がった場所で、風によってふき寄せられることでできた砂の丘（おか）。

札幌県（さっぽろけん）：明治15年（1882）開拓使（かいたくし）がなくなり、北海道には函館県（はこだてけん）・札幌県・根室県（ねむろけん）の3県が置かれることになった。翌年には農商務省北海道事業管理局が設置され、この時期を三県一局時代と呼ぶ。十勝はほとんどが札幌県に入り、足寄郡（あしよるぐん）は根室県に入った。（～明治18年〔1885〕）（ p156）

擦文（さつもん）：土器表面を木のへらで擦って（こすって）つけた文様（もんよう：もようのこと）。北海道で8世紀末から13世紀ころまで見られる土器を特ちょうづけ、この時代を擦文時代という。

産卵（さんらん）：卵を産むこと。

産卵床（さんらんしょう）：魚が卵を産むために水底などにつくるくぼみ。自然状態のサケでは、わき水のあるれき質の（小石の）川底をメスがほることでつくり、産卵後、石でおおわれる。ふ化した仔魚（しぎょ）はしばらくこの中で暮らし、稚魚（ちぎょ）にまで育ててエサを食べるようになると流れの中へうき上がる。

し

仔魚（しぎょ）：ふ化してから、すべてのヒレのスジの数が、成

魚と同じになるまでの子どもの魚。そのあとは稚魚（ちぎょ）という。サケは、仔魚の間は栄養のふくろをつけていてエサをとらず、稚魚になってからエサを食べるようになる。

自作農（じさくのう）：自分の土地を耕す独立した農民。

湿原（しつげん）：しめった場所に広がる草原。かれ草などが分解されにくく（土にかえりにくく）泥炭（でいたん）が得意やすい。

湿地（しっち）：しめった土地。

砂利（じゃり）：小石。小石の集まり。小石に砂が混ざったもの。

集落（しゅうらく）：数軒（すうけん）以上の家が集まって人々が暮らしているところ。アイヌ語でコタン。

しゅんせつ（浚渫）：水面下で水底や水底にたまったものをさらいとること。（ p211）

城柵（じょうさく）：7世紀から、大和朝廷（やまとちやうてい）が東北地方のエミシを支配し、和人を移住させるために設置した、柵（さく）や盛土（もりつち）などで守りを固めた役所。交易の拠点（きょてん）ともされたという。

浄水場（じょうすいじょう）：水を浄化（じょうか）：きれいにすること）して、暮らして使う水道の水（いわゆる水道水）とするところ。

縄文（じょうもん）：土器表面に縄（なわ）を転がすことでつけた文様（もんよう）：もよう）のこと。縄文文化の特ちょうだが、縄文時代が始まってしばらくは、土器に縄文が見られない。北海道では擦文文化（さつもんぶんか）に入ると、見られなくなる。

殖民地（しよくみんち）：開拓者（かいたくしゃ）が開拓をするための土地のことで、役所によって決められ、区分けされている。植民地（しよくみんち）とは異なる。

殖民地解放（しよくみんちかいほう）：開拓者（かいたくしゃ）に殖民地（しよくみんち）：開拓のための土地）貸しつけが始まること。十勝では明治29年（1896）から。

シルト：岩石がとて細かくなったもので、砂と粘土（ねんど）の中間くらいの粒子（りゅうし）の集まり。直径1/16mm～1/256mmのもの。

新水路（しんすいろ）：それまで水が流れていなかった場所に水を流すためつくられた水路。（ p190）

深成岩（しんせいがん）：マグマが地下でゆっくり冷えることによってできた岩石。火成岩（かせいがん）のひとつ。花こう岩やかんらん岩など。

針葉樹（しんようじゅ）：マツやモミなどの針のように細長い葉をもつ樹木。北海道の自然では高地など寒いところで見られる。

す

水害（すいがい）：川の洪水（こうずい）や海の高潮（たかしお）などによって、人の暮らしがダメージを受けること。

水制（すいせい）：岸から流れの中に流れにくいもの（大型のコンクリートブロックやくいなど）をつき出すように置くことで、その場所の流れをおさえ、川岸がけずられるのを防ぎ、川が運ぶ土砂をため、流れを岸から遠ざける方法。（ p212）

スサム（アイヌ語）：シシャモのこと。「シシャモ」ということばは「スサム」からできた。スサムは「スス・ハム（ヤナギ・葉）」からきている。（ p119）

砂（すな）：細かい石。地質学では、岩がぐだけたもののうち直径2mm～1/16mmのものをいう。

せ

生態系（せいたいけい）：生き物の集まりとその周りの環境が、つながりまとまっている様（系）：けい）。

石器（せっき）：石を加工してつくられた道具のこと。ナイフ、ヤリ先、ヤジリ（矢の先）、皮をなめすためのスクレイパー、キリ、すり石、石おの、漁網（きょもう）のおもりなど、さまざまな道具が、いろいろな技術によって作られている。

先史時代（せんしじだい）：文字による記録がない時代のこと。

扇状地（せんじょうち）：川の水は、流れが速いほど大きなれき（石）を運ぶことができる。山地の急流が平地に流れ出すと、流れがおそくなっていくため、それまで運んでいたれきを大きなものから置き去りにしていく。こうしてできたななめで、おうぎ形（扇形）に広がった平地を扇状地という。

扇状地面（せんじょうちめん）：扇状地の表面。段丘（だんきゅう）：段丘（だんきゅう）ができたあと、扇状地であったところがほとんどけずられずに残されてできた段丘面（だんきゅうめん）のことを、とくに分けて扇状地面ということがある。

た

堆積岩（たいせきがん）：海底や湖底、あるいは地表にたまり重なったものが固まってできた岩石。

蛇行（だこう）：曲がりくねっていること。曲がりくねって進むことや流れること。

多細胞生物（たさいぼうせいぶつ）：細胞（さいぼう）がたくさん集まってひとつの体をつくっている生き物。人も犬もヤナギもタンポポもクワガタもカモ多細胞生物。単細胞生物（たんさいぼうせいぶつ）

館（たて）：14～15世紀に北海道南西部へ移住した和人がつくった、その地域（ちいき）の支配拠点（しはいきょてん）であり、交易拠点（こうえききょてん）であり、戦いの砦（とりで）となったもの。

竪穴式住居（たてあなしきじゅうきょ）：地面を数十cmほり下げた床（ゆか）（と壁〔かべ〕）にして、柱を立て、草や樹皮などの屋根をかぶせた家のこと。地面に対してタテに穴をほるため、「竪穴式」と呼ばれる。洞窟（どうくつ）など斜面やガケの横穴を利用した「横穴式住居」に対応した名前。北海道では縄文時代（じょうもんじだい）から、続縄文時代（ぞくじょうもんじだい）擦文時代（さつもんじだい）までつくられる。（ p85）

タフ（tuff・英語）：火山からふき出した火山灰が地上や水中にたまり積もってきた岩石。「凝灰岩（ぎょうかいがん）」。タモ網（タモあみ）：細い枝や竹、針金などの口輪がついたふくろ状の網（あみ）に柄（え）をつけたもの。虫取り網のようなもの。魚をすくい取るのに使う。

段丘（だんきゅう）：川の流れに対してだいたい平行にあり、ガケと平地でできている階段のような丘（おか）。川の流れの速さが速い時に川底を深くけずり、おそくなった時に横方向に谷を広げて平地をつくることのできる。（ p49）

段丘面（だんきゅうめん）：段丘（だんきゅう）の上にある平地。階段でいえば、足をおくところ。かつて川がその高さを流れていた時には、氾濫原（はんらんげん）だった場所。もともと扇